U18 陸上競技大会・関東選抜新人大会

１０月２３日より三重県伊勢市に於いて U16/U18 陸上競技大会が開催され、本校から 110m JH に髙橋健太（２年)、３００ｍＨに佐野　遥（３年）が出場。直前の２２日まで中間考査があったので、前日練習も現地で出来ず、難しいコンディションの中での遠征試合となった。まず初日の２３日に佐野が３００ｍＨに出場した。出場ランキングから見ると下位に位置していたが、本人いわく調子が良いと。本番前のサブトラックの様子を見ても切れのある走りをしている。これはひょっとしたら下克上もあるかもしれないと思う期待を持てる動きをしていた。唯、心配なのはこの種目普段はほとんど実施しない特殊種目で 400ｍＨの経験があっても別物である。その心配がレースでそのまま出てしまった。ふだんより１００ｍ短い分、前半からとばしていけるが、そのためインターバルの走り方が変わってくる。最終ハードルまで２番手争いで来ていたものの、最後のハードルに踏み切り位置が近づき過ぎて急ブレーキが掛かり、万事休す。結果は予選６着となってしまった。

翌２４日、朝から豪雨となり、宿舎のある松坂は道路が冠水するほど雨が降り、競技ができるのか不安な気持ちで伊勢に到着。投擲種目など競技時間の変更のアナウンスが入る中、バックスタンド裏の雨天練習場で身体を動き始める。間もなくすると、雨も小降りになり、サブトラックに移動してハードル練習をしてから予選に臨む。予選は１着通過で決勝進出を決めたが、試験明けの影響か、タイムも 13.88 で、先日のＵ２０の時より動きがやや重い感じがした。決勝は夕方の４時過ぎなので、近くの赤福の茶店で甘いものを摂りリラックスタイムののち、もう一度サブトラックに行き決勝に向けて動きを修正すると、今度は今までになく鋭くスムーズな動きになり、雨もやみ、わずかに追風も吹くようになり、これは優勝もあるかもと見ていて感じた。

いよいよ決勝レース。スタート前の選手紹介が一人ずつ電光掲示板に映し出される。選手ごとにそれぞれ何かしらのポーズをカメラに映していく。

オンユアマークスのコールが掛かり場内は静まり返る。いつもより長い時間を経てセットのコール。号砲と同時に一斉にスタートを切る。いつもだとほかの選手が８歩のところ、７歩のアプローチで走るため他の選手より１台目が出遅れるのだが今回はハマったのか全く遅れていない。むしろ３台目で先頭に立ち、どんどん加速していく。後半もいつもであれば８台目以降からバランスを崩し減速するのが逆に加速するようにリズムが上がってゴールになだれ込んだ。ゴール手前 30m付近のスタンドから見ていたが、明らかに髙橋が１番でゴールを通過したことを確信。速報版に彼が走ったレーンナンバーとビブスナンバー、そしてフィニッシュタイム 13.46 と表示される。先日 U20 日本選手権で出した 13.55 を上回る自己新はもちろんのこと、今季 U18 全国ランク１位、高２歴代３位、高校歴代 10 位となる好記録で優勝を飾ったのである。

全国制覇（あまりこの言葉は好きではない）は近年、板橋高校としては大阪室内に於いて白濱稔也が出場した U20 三段跳で優勝した以来であるが、シーズン中のこの時期に、好記録を出して、レベルの高いライバルがひしめく中の優勝は非常に価値のあるものである。そしてこの大会は、今まで多くのトップ選手が若き日に登竜門となってきた大会でもあり、その後オリンピックや世界陸上などで活躍する選手を輩出している大会でもある。

U18 で優勝に酔いしれている間もなく、次の日には横浜の日産スタジアムに於いて関東新人に

前谷聡真（2年）男子400ｍHと、蒋　純花（1年）女子三段跳が出場。2人とも日曜の午後からの開始時間であったので、伊勢から移動して何とか間に合うことが出来た。
両種目とも技術、体力ともに必要とする種目で熟練するまでに時間のかかる種目である。前谷は110ｍHを取り組んでいたが400mHに適性を見出し、レースの度に2秒ずつタイムを短縮してきたように急激に進歩して都新人で3位に食い込んだことで出場権を得た。今回も失敗を恐れず積極的なレース展開で走り、自己ベストの54.50でゴールしたが、予選4着となり、残念ながら決勝進出とはならなかった。しかしながら、今後につながるレースをしたことは間違いない。
女子三段跳に出場した蒋は、都新人大会7位であったが、今回ラッキーなことに上位者がU18と重なっていたこともあり、棚ぼた式に出場する経験を得たのである。結果は10ｍ６９に終わったが、何より本人にとっては貴重な経験が出来たことが一番であり、今後のモチベーションに繋がったことは間違いない。
来年は日産スタジアムでインターハイが開催される。今回の2人に限らず、是非ともまた戻ってきたいものである。
　遠征試合が重なった大変忙しい日程ではあったが、非常に充実した時間を過ごすことが出来た。また一つ、板橋高校の歴史にこどもたちの活躍を刻むことが出来たのは感慨深いことである。

陸上競技部　部活動指導員　　笹川浩司